

パスカル・リスバ ②

コンゴでは1992年、独立以来初めて民主的な形で選挙が行われることになった。コンゴ労働党(PTC)の単一政党体制から複数政党制へ移行して2年の歳月を費やした。とくに有権者リストの作成には、さまざまな問題があった。大統領選には、パスカル・リスバ、ドゥニ・サス＝ンゲソ、ベルナル・コレラ、アンドレ・ミロンゴの4人が立候補した。これまでのコンゴの政界に幾度も登場してきた顔ぶれだった。

大統領選はフランスの方法に倣って、1回目の当選で過半数を獲得した者は当選するが、そうでない場合は上位2人の決選投票となる。1回目はリスバが35.89%で1位、2位は20.32%でコレラだった。この時点でこれまで約10年間大統領だったサス＝ンゲソの落選が決まった。首都で人気のあるコレラとの戦いを前に、リスバはコンゴ労働党と手を結んで2回目の選挙に挑んだ。そして61.32%の投票率を獲得して当選した。ただ首都ではコレラの優勢は変わらなかった。選挙には不正があったとコレラ側が訴えたが認められなかった。こうして6代目の大統領としてリスバが就任した。

大統領を任された彼の前にはさまざまな問題が山積していた。とくに国の経済の立て直しは大きな問題であった。前政権時代から国の財政は破綻寸前だった。公務員への給与の未払いが7カ月に及んでいた。失業率は高く、街には職を求めて多くの若者が溢れていた。石油に依存した経済構造を打破するために、森林や農業開発を強化するが、膨らんだ借金は大きかった。コンゴの石油開発を担うエルフコンゴに対し、当面の石油開発を担保に借金を申し入れたが断られる。そこで、アメリカの石油会社と契約を結び公務員への給与などが支払われるようになった。

経済の疲弊が続く一方で、政治の均衡を保つのに苦慮した。とくに組閣に関しては各政党に配慮する必要があった。複数政党制は確かに民主主義の根幹をなすものだが、十分な準備もなく、またそうした政治理念に立脚した政党政治のあり方が浸透していないなかでは、これまでの独裁政治のなかで押さえ込まれてきた民族的なアイデンティティと結びついてしまいかねない。結局、ここでも国を二分する形で北部と南部の対立が少しずつ表面化していくのだった。

国の立て直しに対して、大統領は一極集中の体制を分散させることをもくろんでいた。その象徴的な政策がマリアングアビ大学の地方への分散移転だった。医学部を第二の都市ポワント・ノワールに、科学部門は第三の都市ドリジーへと画策していた。しかし、こうしたことに対して反対意見が多く、また十分な準備がなかったこともあり、大学の運営が混乱し、結果的に1年間授業が行われないという空白期間を生んでしまったのである。

このように彼は次から次へと新たな政策を繰り出した。それだけ国が危機的な状況にあったからだろうが、同時にこれまでの体制からできるだけ早く脱却しようとしていたのかもしれない。もしかしたら「アフリカにおける小スイス」と夢見ていたように、彼には10年後、20年後のあるべきコンゴの理想像があり、その姿と現実の隔たりの大きさに焦りがあったのかもしれない。急速な改革は石油会社との契約や大学の改革など、結果的に社会に混乱を招くことになってしまったのである。

経済の立て直しには、世界銀行や国際通貨基金からの援助も必要とされた。そのためには政治や経済構造など改善が求められた。国家予算の削減や国営会社の民営化が急務でもあった。国の経済

疲弊に追い打ちをかけるかのように、1994年にはフランスが旧植民地の通貨として流通させていたCFAの50%の切り捨てが決定した。それまで1フランスフランが100CFAだったが、50CFAと価値が半減したのである。日用品の多くを輸入に依存していたコンゴにとっては、大打撃であり、人々の暮らしは一層苦しくなっていた。急速な変革に反対する人たちの声はさらに高まり、大統領に選出された4年後には電気や水道など、民営化に反対する大規模なストライキが行われ首都の機能が麻痺した。軍や警察においても、前政権に近い幹部たちは次々に解雇された。

また、各リーダーがそれぞれに私兵を持つようになっていくことは、国の治安に大きな影響を与えた。リスバ大統領は前政権の色彩の濃い国軍とは別に「ココイ」(Cocoy)と呼ばれる軍隊を持っていた。またサス＝ンゲソは「コブラ」(Cobra)、コレラは「ニンジャ」(Ninja)とそれぞれに個別の私兵を組織したのである。実際にこうした兵士たちによる小競り合いがこの時期何度も起きた。2003年の武力衝突では2,000人も死者が出たという。

このような社会背景のなかで、1997年8月に大統領選挙が行われることになったのである。

1997年5月、オパング派とサス＝ンゲソ派が武装闘争を始め、それがやがて首都にも飛び火し内戦へと突入する。6月にはサス＝ンゲソ派のコブラとリスバ派のココイが武力衝突した。街のあちらこちらで銃撃戦が繰り広げられ、多くの住民が避難、フランスも自国民を国外に避難させるために軍を派遣した。リスバ大統領にとって、サス＝ンゲソの新派が多い正規軍は頼りにならなかった。また、コブラの多くはリスバによって解雇された軍人だった。劣勢に立たされたリスバ派にイスラエルで軍事教育を受けたココイが援軍としてやってくる。和平交渉が続く一方で武装闘争も続き、戦車など砲撃が激化し街のあちらこちらが破壊されていった。同時に住人のいなくなった住宅や店は敵味方関係なく略奪の対象となり、それは私兵たちの「報酬」となっていた。

和平交渉は隣国ガボンの首都リーブルヴィルで行われていたが、あまり進展せず、現場ではアンゴラやチャド、ルワンダなど近隣国からの軍事支援を受けたサス派が首都を武力で制圧し、リスバ体制は崩壊した。1997年9月24日には、サス＝ンゲソが勝利宣言をし、自らが大統領に返り咲いたとの声明を発した。

パスカル・リスバは首都からドリジーへ逃避、その後国境を越えガボン、そしてイギリスに渡る。自分こそが正当な大統領であると訴え、シラク大統領やエルフ・コンゴがサス＝ンゲソを指示したと糾弾するものの国際社会には響かなかった。彼に対しては国家反逆罪が下され30年間の懲役が決定した。2009年には恩赦が与えられたが、2020年8月、彼は祖国の土を踏むことなく、滞在先の南仏のペルピニャンで88年の波乱万丈の人生を終えた。

リスバ大統領の5年間の治政には賛否両論がある。1993年と1997年の2回の内戦ではかつてない規模で犠牲者が出た。その一方で対外的な借金を返済し、社会主義時代に停滞続けた経済の立て直しに尽力した。いずれにせよ、急激な民主化によって国が混乱したことは間違いなく、その混乱の背後には旧宗主国をはじめ、アフリカに利権を求める先進国の影が見え隠れする。